

形容詞のように使われる過去分詞

— fallen leaves を出発点として*

土 居 峻

1. はじめに

先日、某大学の英作文の授業で fallen leaves という名詞句の解釈について、ちょっとした議論となった。つまり、過去分詞 fallen は「受け身」と捉えてよいのか、ということである。この点について、どうも思い違いをしている学生が多いようである。そこで、本論においては、前半でこの fallen leaves の解釈について考え、その後、関連して、形容詞のように使われる過去分詞はどのように可否が決まるのかについての論文を紹介したいと思う。

2. fallen leaves の解釈について

2.1. 動詞の分詞形は形容詞のように振る舞うことができる

fallen leaves の fallen が動詞 fall の過去分詞であることについては、異論はないはずである。動詞の分詞形が形容詞のように振る舞うことができることは (1)・(2) でも見られる通り、よく知られている。

- (1) a. They found a big room. [形容詞]
b. They found a hidden room. [分詞]

* 本論執筆の過程において、山本幸一氏（名古屋外国語大学非常勤）から重要なコメントをいただいた。記して感謝する。

- (2) a. His eyes remained red. [形容詞]
 b. His eyes remained closed. [分詞]

(1) では、形容詞や分詞が限定用法で使われており、名詞 *room* を修飾している。冠詞と名詞とともに、名詞句 *a big/hidden room* を形成し、動詞 *find* の目的語となっており、5 文型でいえば III (SVO) 型の文である。(2) は叙述用法であり、動詞 *remain* の補語となっている II (SVC) 型である。

2.2. 形容詞的に使われる過去分詞は「受け身」か

これら形容詞的に使われる過去分詞は「受け身」の意味を表わすものが多い。現に (1b) の *hidden* は「隠された」、(2b) の *closed* は「閉じられた」、と「受け身」の意味に解される。ところが、本論で問題としている *fallen leaves* の *fallen* を「受け身」の意味とすることは誤りである。

そもそも、*fallen* は「受け身」の解釈ができない。なぜなら、*fall* 「落ちる」は日英語ともに自動詞であり、受け身にすることができないからである。英語学を専門にされている先生方からは、「そんなことは知っている」とご批判を受けそうであるが、この点を間違う学生は実に多い。ここで、「落とされた」とすれば受け身にできるのではないかと問う者もありそうだが、それは他動詞「落とす」の受け身であり、自動詞「落ちる」から「落とされた」を派生させることはできない。それでは、この *fallen* はどのように解釈するのか。

結論から言えば、自動詞の過去分詞は「完了」の意味を表わす。類例としては、(3) のようなものが挙げられる。

- (3) a. The Japs were alert to seek escaped prisoners in the areas around the northeast coast. (Bob Norris, 2014, *The Dust Bowl to WWII: One Young Man's Journey of Survival*, p. 175)
 b. For developed countries, Uruguay Round commitments were substituted by a simple linear cut. (Niel Andrews, David Bailey, and Ivan Roberts, 2004, *Agricultural Export Subsidies and Developing Countries' Interests*, p. 43)

- c. try to solve the mystery of the vanished treasure trove
(mvac.uwlax.edu/book-review/st-oswalds-niche/)
- d. The decision to hire a retired state employee or retired teacher under this section is at the discretion of the appointing authority.
(<http://legislature.maine.gov/statutes/5/title5sec17859.html>)

他動詞過去分詞の「受け身」も自動詞過去分詞の「完了」も、ともに「be + 過去分詞」によって生まれる意味を表わしていると思われる。古い用法ではあるが、(4) のように「be + 自動詞の過去分詞」で「完了」を表わすことができる。

- (4) a. He *is* gone.
b. Spring *is* come.
c. The leaves *are* fallen.
d. The sun *is* set.

現代英語では、(4) の各文は古い用法の名残であるとされ、いわゆる「往來発着動詞」に限って適用することができる。荒木・宇賀治 (1984: 432-433) によれば、変移動詞 (mutative verb) で be 完了よりも have 完了が優位になったのは、18 世紀末になってからである。つまり、そのころまでは主な自動詞が be 完了をとっていたということになる。

ここで、この「完了」の意味が「have + 過去分詞」によって生まれるとしない理由は2つある。1つ目は、この型を認めてしまえば、他動詞の「完了」も認めてしまうことになることである。2つ目は、ともに「be + 過去分詞」とすることによって、統一的に捉えることを念頭に置いている。

2.3. 「落とされた葉」をどう表現するか

fallen leaves には「落ちた葉」という「完了」の意味しかないとする、「落とされた葉」という「受け身」の表現はどのように表せばよいのだろうか。fall に対応する他動詞 drop の過去分詞 dropped を使えばよいと思い、*dropped leaves と書こうとする学生も多いのではないだろうか。ところが、*で示している通り、このように表現することはできない！。

一般的に前置修飾の形容詞類は恒久性のある (permanent) 事柄を示し、後置修飾の形容詞類は一時的な (temporary) 事柄を表わす傾向が強いといわれている (cf. Quirk *et al.* 1985: 1242)。ここでいう permanent とは、「(はじめから) ずっとそのような性質を持っている」ということである。となると、*dropped leaves は「もとから drop されるという性質を持った leaves」ということになる。はじめから「落とされる」という性質を持った葉はないのであるから²、*dropped leaves とは言えなくなるのである。そこで、後置修飾とし、³leaves which are dropped とすると容認度が上がる³。そして、このままでは「落とされる」であり、「落とされた」にするためには完了形にし、leaves which have been dropped とするのである⁴。

また、分詞に限ったことではないが、限定用法で用いられる形容詞類は (5a) のように「変わらない永続的な意味を持ち、同時にほかの物と区別する役割を果たす」傾向、叙述用法で用いられる形容詞類は (5b) のように「現在の一時的な状態を示す」傾向にあるともいわれている (cf. 綿貫他 2000: 263)。

(5) a. Whose is this blue jacket?

b. I am very tired after my long journey. (cf. 綿貫他 2000: 263)

他の物と区別する役割は確かに担っているにしても、dropped が leaves の「変わらない永続的な」説明ではないため、この点においても²dropped leaves とは言いにくくなる。

3. 形容詞のように使われる過去分詞はどのように可否が決まるのか

ここまでは、fallen leaves の解釈と、「落とされた葉」の表現のしかたを見た。ここで、はたして全ての動詞の過去分詞が fallen leaves のように形容詞的に使うことができるのかという疑問が出てくる。我々は経験上、そうではないことを知っている。それでは、どのような制約があるのだろうか。

このことについては、Levin and Rappaport (1986) が分詞の可否はどのように決定されるのかという観点から詳細に分析しているので、それを以下

に紹介しておこうと思う。

3.1. 従来の Adjectival Passive Formation

形容詞のように使われる過去分詞を作る操作 (Adjectival Passive Formation) には (6) の特質が含まれる。

(6) *Properties of Adjectival Passive Formation*

- a. Affixation of the passive morpheme *-ed*
- b. Change of category: [+ V, -N] → [+ V, + N]
- c. Suppression of the external role of the base verb
- d. Externalization of an internal role of the base verb
- e. Absorption of Case
- f. Elimination of the [NP, VP] position

(Levin and Rappaport 1986: 624)

このうち、(6d) が生成文法では最も中心的な関心である。

Levin and Rappaport (1986) (以下、L&R と示す) はまず、それまでにいわれていた「theme 項を外項化する」という規則 (例えば Williams (1981) など) を検討する。ところが、この規則には不都合がある。例えば、(7a) から派生される (7b) の適格性は説明できるが、(8a) から派生される適格な (8b) の説明ができない。

- | | |
|---|------------|
| (7) a. John taught manual skills to children. | (L&R: 629) |
| b. untaught skills | (ibid.) |
| (8) a. John taught children manual skills. | (ibid.) |
| b. untaught children | (ibid.) |

(8a) の children が theme 項であるとは俄に信じがたく、「theme 項を外項化する」という規則では (8b) が適格であることが示せない。

3.2. Sole Complement Generalization

そこで、L&Rは(9)を想定する。

(9) *Sole Complement Generalization:*

An argument that may stand as sole NP complement to a verb can be externalized by Adjectival Passive Formation. (L&R: 631)

このことにより、themeなどの θ -roleは考えなくて済むようになる。(9)に基づけば、(10)はともに適格であるため、そこから派生される(7b)と(8b)はともに適格であることが示される。

- (10) a. John taught manual skills.
b. John taught (the) children.

同様に、(11)も適切に説明されるように見える。

- (11) a. The pillow remained stuffed.
(cf. We stuffed the pillow with feathers.)
b. *The feathers remained stuffed.
(cf. We stuffed feathers into the pillow.) (ibid. 634)

ところが、The feathers remained stuffed in the pillow.のようにin the pillowを明示すると適格になってしまう(L&R: 636)。Sole Complement Generalizationでは、この点が捉えられない。もっとも、これは*Stuff the feathers.がStuff the feathers in the pillow.とすると適格な文となるのと平行的である(L&R: 637)。

3.3. L&Rの考え ①

L&Rはまず、「動詞の項がどのようにして θ -roleを付与されるのか」、「その θ -roleが義務的に付与されるのか、随意的なのか」の2点を考えなくてはならないとする(L&R: 640)。そして、それに基づき、「動詞によって直接付与される内項(direct argument)を外項化する」という規則を仮定す

る (L&R: 643)。また、義務的な項は統語上対応する位置を占めなくてはならないとする Projection Principle や義務項は必ず付与されなくてはならないとする θ -Criterion が満たされる必要がある。

問題の動詞 *stuff* の語彙主題特性 (lexical-thematic properties) は (12) のように表示される。

(12) *stuff*:

A. agent <*material*, location>

B. agent <(material), location> (ibid. 643)

この表示の意味は L&R (638-639) を参照していただくのがよいが、簡単に記しておくとして以下の通りである。< >の外側が外項であり、統語上は主語に対応する。斜体になっているのは、動詞によって θ -role が直接付与される内項で、直接目的語に対応する。残りの項は、他の要因によって間接的に θ -role が付与される項である⁵。()内は随意的な項を表わしている。また、*spray/load* 動詞のように交替のある動詞は (12) のように A、B 二つの表示を有する⁶。

(12) の語彙主題特性から、(13)-(15) の文の可否が的確に判断される。

(13) a. *The feathers remained stuffed.

b. The feathers remained stuffed in the pillows. (ibid.: 644)

(14) a. The pillows remained stuffed.

b. The pillows remained stuffed with feathers. (cf. ibid.: 643)

(15) a. *the carefully stuffed feathers

b. the carefully stuffed pillows (ibid.: 644)

(15a) は、叙述用法の (13) に対応するものであるから、(13b) のように補語で location 項を明示できれば適格になるはずである。ところが、Head-Final Filter (Williams 1982) により、前置修飾の形容詞句は補語をとることができない。よって、(15a) は適格にすることができない。

3.4. L&Rの考え ②

ここでL&Rは「動詞によって直接付与される内項を外項化する」というのは、本当に必要な規則なのであろうかと問う。実は、過去分詞が動詞から形容詞へと品詞転換するときどのように語彙主題特性が「投射」されるのかを考えれば、この規則は不要なのである。つまり、形容詞となった過去分詞は外項を必要とするので、動詞としては直接項 (direct argument) になっていたものが外項へとずれる。よって、特段の規則を設けなくとも、形容詞一般の性質上、もともと直接内項が外項化されるのである。

結局、形容詞的な分詞の可否を決定するのは、(16) に示す3つの要素ということになる。

- (16) i. the lexical-thematic properties of the base verb
- ii. the θ -role assigning properties of adjectives
- iii. other general principles of grammar, such as the Projection Principle and the θ -Criterion (L&R: 656)

以上、L&Rの内容を紹介した。原稿4ページほど費やしてしまったが、それほどややこしい事柄なのである。

自動詞の過去分詞を *adjectival passives* と呼ぶことに抵抗はあるが、このことについてはL&R (654, f.n. 36) も不備を認めている。しかし、他動詞も自動詞も統一的に説明できることはよいことであろう。

4. まとめ

本論では、*fallen leaves* の解釈と「落とされた葉」の表現法を考えた。また、形容詞のように使われる過去分詞の可否について Levin and Rappaport (1986) を紹介した。

他動詞過去分詞は「受け身」、自動詞過去分詞は「完了」をあらわし、ともに「be + 過去分詞」によって生ずる意味を表わす。fall は自動詞であるから、その過去分詞 *fallen* は「完了」を表わす。つまり、*fallen leaves* は「落とされた葉」ではなく「落ちた葉」である。

「受け身」の「落とされた葉」は *leaves which have been dropped* のように

他動詞 **drop** の過去分詞を後置修飾で使用する。前置修飾は「(はじめから) ずっとそのような性質を持っている」ことを示すため、***dropped leaves** は「もともと『落とされる』という性質を持った葉」という解釈ができてしまい、そのような葉はあり得ないため不適格となるのではなからうか。

形容詞のように使われる過去分詞を作る操作の中では、もととなる動詞の内項 (internal role) の外項化が最も中心的な関心である。この点について、Levin and Rapaport (1986) は「動詞によって直接付与される内項を外項化する」という規則を仮定し、あとは Projection Principle や θ -Criterion が満たされる必要があるとした。このことにより、形容詞的に使われる過去分詞について統一的に説明することができた。

Levin and Rapaport (1986) はさらに論を進め、特段の規則を設けなくとも、形容詞一般の性質上、もともと直接内項が外項化されることを明らかにした。形容詞となった過去分詞は外項を必要とするので、動詞としては直接項 (direct argument) になっていたものが外項へとずれるのである。

ここまでの流れを受け、英語教育の立場を考えてみると、他動詞は「受け身」、自動詞は「完了」という原則を踏まえ、双方の用法があるものについては、意味は文脈から見つけるようにする、ということの基本とするのがよさそうである。同時に前置修飾・後置修飾の特徴や限定用法・叙述用法の特徴など、より一般的な文法の習得も、英文理解にも英作文にも必要となることを理解させなければならないが、そこが難しいところである。

Levin and Rapaport (1986) のような議論は教室には向かないが、一教員としては知らないより知っていた方が引き出しが増える。ただし、紹介だけでこれだけの紙面を費やしてしまうほどの理論を俄に習得することは不可能である。難しい議論は英語学者に任せておき、定説が確立されれば、そのうち簡便な解説も出てこよう。我々が当たり前前に活用している文法の知識の多くも、もとはといえば専門の学者先生方の探求が結集し、生まれ出てきたものなのである。このような知識も織り交ぜて、学生の目を「ことば」そのものに向けさせられるのが理想であるが、これもまた難しいところである。

注

1. ウェブ上を検索してみると、(i)、(ii)をはじめ、確かに **dropped leaves** の例は多く存在している。
 - (i) Many times the problems begin on one side of the tree, and have the symptoms of brown or **dropped leaves**.
(http://web.extension.illinois.edu/lms/eb107/entry_5346/)
 - (ii) Always clean up around your plants, taking away **dropped leaves** and stems, to help prevent mildew, disease and insect damage.
(<http://web126.cc.utexas.edu/expert/show.php?id=3441>)

ただし、注意しないといけないのは、**drop** には自他両用法が存在することである。自動詞 **drop** の分詞形を用いた **dropped leaves** は、「完了」の意味を表わし **fallen leaves** と同様、適格である。一方、他動詞 **drop** の分詞形を用いた ***dropped leaves** は、「受け身」を表わすが、こちらは不適格ある。このことについては、英国人・米国人各1名にしか確認していないが、双方が「受け身」の意味での ***dropped leaves** を不適格と判断した。
2. 葉は、木や草についた状態から「落ちる」あるいは「落とされる」のである。
3. この場合、「be + 自動詞過去分詞」で「完了」を示しているのではなく、他動詞過去分詞が **be** 動詞の補語となって、「受け身」を示しているものと解す。
4. ここで過去形を用いて ¹leaves which were dropped としないのは、葉が落とされた後には「落とされた」という状態が継続するからである。「状態の継続」は完了形で示される。また、¹leaves which are/were dropped が避けられる背景には、**be** 完了との形式上の類似性もあると思われるが、この点に関しては論じないことにする。
5. 他の要因とは、適切な前置詞の使用や二重目的語構文の間接目的語位置の使用などのことである。
6. B の表示よりも A の表示のほうが優勢という意味はないことに注意。

参考文献

- 荒木一雄・宇賀治正朋 (1984) 『英語史 III A』(英語学大系 10) 東京: 大修館書店。
- Levin, Beth and Malka Rappaport (1986) "The Formation of Adjectival Passives." *Linguistic Inquiry* 17: 623-661.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 綿貫 陽・宮川幸久・須貝猛敏・高橋尚弘 (2000) 『ロイヤル英文法』(改訂新版) 東京: 旺文社。
- Williams, Edwin (1981) "Argument Structure and Morphology." *The Linguistic Review*

1: 81-114.

Williams, Edwin (1982) “Another Argument That Passive Is Transformational.” *Linguistic Inquiry* 13: 160-163.

(金城学院大学非常勤)
s.doi@alm.icu.ac.jp